第一回名古屋大学多文化共生川柳コンテストの実施と応募作品の分析：川柳が反映するコロナ禍における学生生活

国際教育交流センター教育交流部門
伊東 章子・曾　煒・グリブ ディーナ

１．はじめに

新型コロナウィルス感染症の世界的流行は，留学生を取り巻く環境を激変させた。度重なる非常事態宣言下での自粛生活，人との接触が制限される中での孤立感，不慣れな遠隔授業，アルバイト収入や母国からの仕送りの減少による経済的困窮，さらには出入国管理の強化で日本渡日や母国への一時帰国がままならない不自由さなど，留学生支援の現場ではややもすると留学の意義すら見失いかねない留学生たちの苦悩が多く聞こえてきた。新型コロナウィルス感染症は世界中であまねく人々の暮らしを一変させたが，特に異文化で暮らす留学生であるが故の不安や悩み，失望を見逃すことはできない。そこで名古屋大学国際教育交流センター教育交流部門では2020年12月に，コロナ禍における留学生支援，国際共修の取り組みの一環として「名古屋大学多文化共生川柳コンテスト」を企画した。企画には人文学研究科国際化推進室および工学研究科国際交流室からも協力が得られた。川柳は同じ５・７・５の17字による定型詩である俳句と異なり，世俗や風俗への批判やユーモアなどを読み込めることから，表現的な技巧にとらわれずに留学生の自由な発想や内面の吐露を作品に盛り込むことができると考えた。「今だからこそ，気持ちを川柳に託して，葛藤や悩みを笑いで吹っ飛ばそう」と呼びかけて，コロナ禍で抱える複雑な思いを振り返りつつも，未来への期待が込められている川柳を広く募集した。本稿では，本川柳コンテストの実施報告を行うとともに，投稿作品の分析に基づき，コロナ禍における学生たちの意識について考察する。

２．本企画の意義および概要

本コンテストを企画するにあたり，留学生側および支援者側の視点からそれぞれ以下の点を目的として据えた。まず留学生に対しては，１）人的交流が厳しく制限される中で留学生に日本文化と接触する機会を提供すること，次に２）激変する環境下において，自らの内的世界と対面しそれを言葉として表現することで精神的ストレスを軽減することである。そして３）特に孤独を感じやすい新規渡日の留学生に対しては，コンテストへの参加を通じて大学コミュニティとの接点を作ることである。一方，支援者である開催者側の視点で言えば，４）新型コロナウィルス感染症が世界的な「分断」を生み出す中で改めて文化的多様性と異文化共生の重要性を訴えること，さらには５）投稿作品を通じて学生たちの悩みや環境変化への戸惑いを分析し，今後の留学生支援，国際共修活動へのインサイトを得ることが主な目的であった。

2020年12月に専用のホームページを日英併記で作成し，投稿作品を受け付けた。応募作品のテーマは2020年の感想や2021年への抱負，研究・学業などとし，参加者の率直な心情を重視するためにあえてテーマを絞らなかった。応募期間は2020年12月15日から2021年１月20日までで，「一般枠」（留学生以外の日本人参加者），「留学生枠」，「リレー枠」という三つの応募枠を設けた。「リレー」とは，５・７・５語のうちどれか１句のみを投稿するもので，お互い知らない者同士で１首を完成させる。こちらは文系と理系の交流促進を目指して企画した。また作品は日本語だけではなく，英語作品も受け付けた。英文俳句や川柳には文字制限がなく，定型詩としての性格を失うが，多文化コミュニケーションの有効的なツールだとの指摘がある（Doyle, 2010）。本コンテストの意義も踏まえ，英語作品での投稿も積極的に呼びかけた。

なお，留学生の中には川柳に関する知識が不十分な者も多い。そのため，応募期間中でも応募作品を随時ホームページ上で公開し，これまで川柳を作ったこと

のない留学生でも同じ留学生の作品を参考にしながら気軽に挑戦してもらえるよう工夫した。

図１．第一回名古屋大学多文化共生川柳コンテストポスター図案

３．実施状況

募集締め切り日までに87作の投稿があった。その内訳は，「一般枠」に45作品，「留学生枠」に36作品の投稿があった。また「留学生枠」の36作品のうち４作品が英文作品だった。「リレー枠」には40件の投稿があり，計６作品が完成した。投稿者は名古屋大学や他大学で学ぶ留学生と日本人学生，そして大学生以外の者を含む60名で，開催者が予想していなかった小学生や70代などの幅広い年代からの参加があった。投稿者の国籍も日本，中国，トルコ，ブラジル，アメリカなどと多岐にわたり，コロナ禍における多文化共生という本コンテストの趣旨に対して幅広い共感が得られた結果となった。

受賞作品の選考は，名古屋大学国際教育交流センター教育交流部門長を委員長とする選考委員会を設置し，委員長および教育交流部門員８名が無記名形式にて採点した。選考委員会には日本語母語話者と非母語話者（中国，ケニア，ロシア），文系分野専門家と理系分野専門家などが加わり，投稿者だけではなく選考する側の文化的多様性も重要視した。採点は各選考委員の個人判断に委ねたが，日本語表現の技巧のみならず，多文化共生川柳ならではの作品に込められたメッセージ性，ユーモア，多文化共生への共感などへの配慮を呼び掛けた。

審査の結果，「一般枠」から２作品と「留学生枠」から１作品の計３作品が優秀賞に選ばれた（「一般枠」の最高得点が同点で２作品だった）。次に選考委員からの得点が多かった上位３作品が特別賞（教育交流部門特別賞，文学部国際化推進室特別賞，工学部国際交流室特別賞）に，これに続く４作品と「リレー枠」の２作品の計６作品が入賞に選ばれた。優秀賞受賞者に対しては表彰式を行い，選考委員会委員長より表彰状と賞品を授与した。その他の受賞者に対しても，表彰状と名古屋大学グッズを贈った。

〈優秀賞３作品〉

◆　意外だな　初めて知った　鼻と口
（詠み手：あやたか）

◆　いつもより　マウスを握る　ねずみ年
（詠み手：ラザン）

◆　隔離中　窓を閉めれば　部屋ライブ
（詠み手：Kemizunomi）

図２．授賞式記念撮影
（川北一人名古屋大学国際機構機構長と受賞者３名）

〈特別賞３作品〉

◆　五分前　飛び起き繋ぐ　Zoom 授業
（詠み手：岡部雅之）

◆　デートまえ　マスク選びに　時間かけ
（詠み手：やっとかめめーだい人文学部）

◆　給付金　親の財布へ　Go To し
（詠み手：ペンギンですよ）

〈入賞６作品〉

◆　マスク客　咳ひとつで　席を立ち
（詠み手：やっとかめえだい）

◆　自粛明け　君の笑顔に　ひさしぶり
（詠み手：ラザン）

◆　冬のゼミ　暖房代わり　寒い風
（詠み手：さようなら，地球温暖化）

◆　「マスクして」耳に本当の　タコできる
（詠み手：M きの）

◆　小池知事　スーツ姿に　戻るよう　（リレー枠）

◆　奇数年　東京五輪　かなうかな　（リレー枠）

４．投稿作品の分析および考察

4.1.　言語データの分析

本コンテスの日本語による応募作品は「リレー枠」で完成した６作品を加えた83点だった。言語データとしては極めて少量ではあるが，ここで作品に用いられた単語について分析を試みたい。下記はフリーソフト（UserLocal テキストマイニングツール）により単語の出現頻度を定量的に測定したうえで，ワードクラウドにて可視化した。

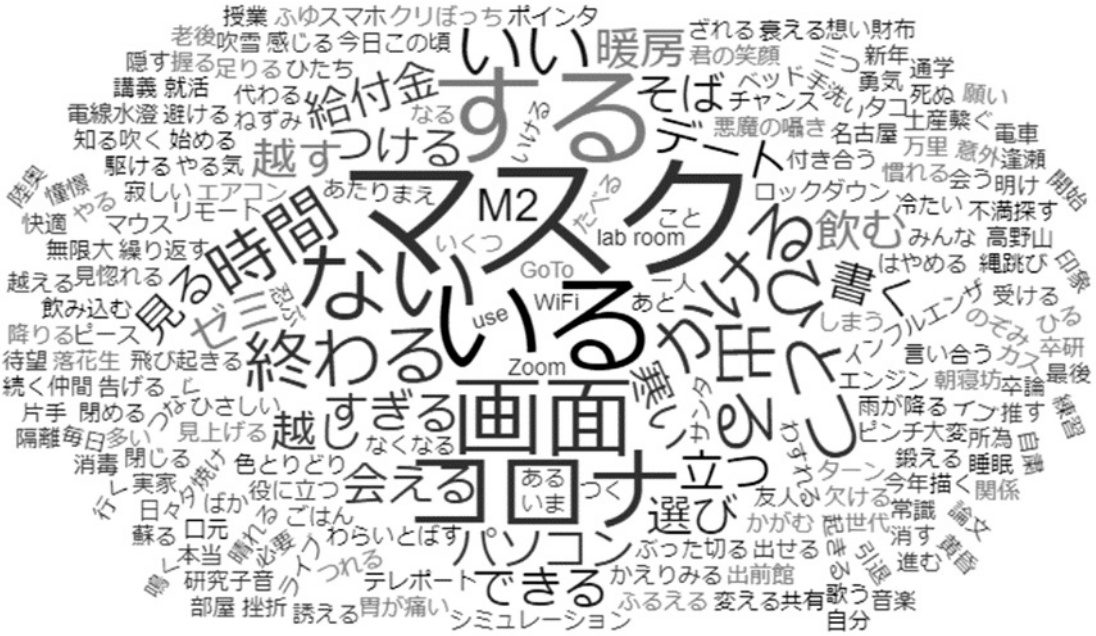

図３．応募作品で用いられた全単語データのワードクラウド

図３が示すように，「マスク」に続いて「コロナ」が最も使用頻度が高く，さらに新型コロナウィルスの経済支援である「給付金」，学生生活に関わる「Ｍ２」や「ゼミ」，そしてオンライン授業と関すると考えられる「画面」，「パソコン」が続く。また，学生の私生活をのぞかせる「デート」も多く登場していて，興味深い。この他，「暖房」と形容詞の「寒い」も比較的に頻出頻度が高いが，作品の応募時期が12月と冬季だったことが一因だろう。特に感染防止の対策の一部として換気が徹底されているため，一段と寒さを体感したのかもしれない。

さらに，UserLocal テキストマイニングツールによる単語分類に基づき，日本人学生と留学生の作品に出現頻度の高い単語をグループ化した（図４）。特徴的なのは，留学生の作品にのみ日本の地名など固有名詞が使われるところで，日本および日本文化への関心度の高さがうかがえる。また，日本人のグループは，課外活動も含め学生生活全般に関わる使用単語の種類が豊富である。

4.2.　川柳から読み取る学生生活

前節では，少量のデータに基づき，限定的ではあるものの応募作品における出現頻度の高い単語について分析を試みた。続いて，コロナ禍における投稿者の心

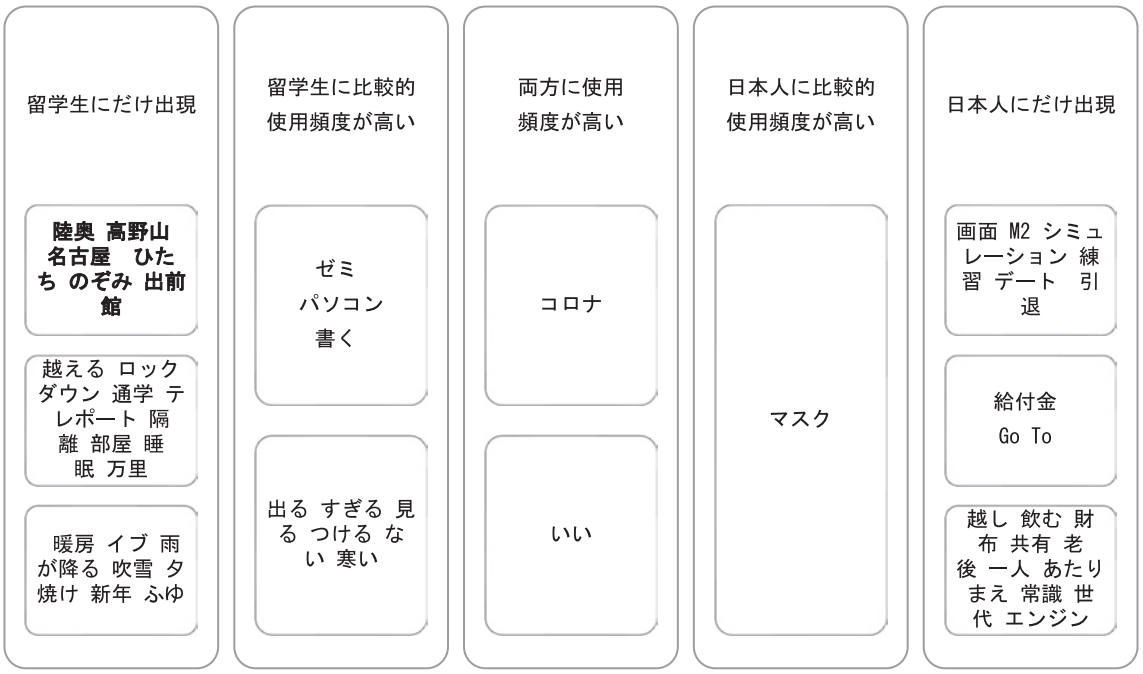

図４．出現頻度による単語分類

情や意識について考察するために質的分析も試みる。ここでは，歴史が長く，先行研究が豊富な「第一生命サラリーマン川柳」を参考にしたい。

多文化川柳コンテストにおいては，そもそも出題が誘導的であったこともあり，新型コロナウィルスへの言及が最も多かった。前述したように「コロナ」は頻出単語の一つであり，未知の感染症に振り回されて終わろうとする2020年の年の瀬に，先行きの見えない不安を歌う作品が多い。

a. コの先も ロックダウンに ナるのかな
b. コロナ禍か 中々大変 もう１年

また，新型コロナウィルスにより日常生活が侵食された象徴の一つが「マスク」である。恐らく体感的に実感しやすい日常生活上の変化であり，「マスク」は出願頻度の最も高い単語となった。

c. 「マスクして」耳に本当の タコできる
d. デートまえ マスク選びに 時間かけ
e. “Non-plastic masks” In a laundry day, wash another outerwear, lather, rinse, repeat.
f. 意外だな 初めて知った 鼻と口

f. は優秀賞作品の一つである。直接的な「マスク」という単語が使われていないものの，マスクありきで広がる交友関係を題材とする作品である。親しくなった友人でさえ，その人の顔全体を知ることのない中で，鼻と口を見るという行為が心的距離の縮まりを連想させている。

マスクと並び，突如日常生活に組み込まれた新たな規範が，手指の消毒と喚気である。川柳作品の募集期間は，ちょうど「第二波」の時期と重なっていた。下記の２作品は，コロナ禍の新たな規範をまるで冬の風物詩かのように表現している。

g. 冬のゼミ 暖房代わり 寒い風
h. 冬告げる 消毒液の 冷たさよ

野・北村（2018）によると，サラリーマン川柳が始まった1987年以来，「健康」を題材した作品が毎回欠かさず登場する。新型コロナウィルスも疾病であり，自身の「健康」に対する危惧であるとも言えなくもないが，本コンテストの投稿者の大半を20代の学生が占めていることを考えると，疾病としてより，その世界的流行がもたらした急激な生活様式の変化が詠まれていると考えられるだろう。

学生の視点に立てば，マスクや手指の消毒，換気以上に学生生活を様変わりさせたのがオンライン授業だろう。本コンテストの投稿作品においても，学生が

日々遠隔授業と奮闘する姿が多く表現されている。下記 i. のように不慣れな授業に苦労を訴える姿もあれば，j.，k. のように遠隔授業のメリットを享受する姿もある。

i.　慣れないな　画面じゃ足りない　この想い
j.　五分前　飛び起き繋ぐ　Zoom 授業
k.　通学は　誰もがみんな　テレポート
l.　新年に　一つの願い　睡眠を

l. は日本に入国できず，母国からオンラインで授業に参加している留学生からの投稿である。時差の関係で，睡眠時間を削って授業に参加しているという。年が明け，感染症の流行が収まり，早く渡日して授業に参加したいという気持ちが込められている。j. は多くの学生が，一度は経験しているのではないだろうか。風景がそのまま思い浮かぶ作品であり，優秀賞に選ばれた。

柏村（2020）は，サラリーマン川柳においては，インターネット，AI，スマートホン，SNS，キャッシュレス等の飛躍的に進化するデジタル化を「人々にもたらす喜怒哀楽」として考察しているが，本コンテストにおけるオンライン授業への受け止め方もこの「喜怒哀楽」と一致している。

本川柳コンテストは，留学生に投稿を呼びかけたこともあり，審査の上では必ずしも日本語の技巧性に重きをおいていない。しかしそれでも，言葉遊びでくすりと笑わせる川柳ならではの作品もあった。

m. いつもより　マウスを握る　ねずみ年
n.　給付金　親の財布へ　Go to し

m. は優秀賞作品であるが，オンライン授業によりパソコンを利用することが多くなった（マウスを握る）ことを，2020年の干支であるねずみ年にかけている。n. は特別賞受賞作品で，給付金と Go to キャンペーンという二つの経済政策を読み込みながら，給付金が自分の手には渡らなかった悲哀をユーモアを以て表現している。正しく，「今だからこそ，気持ちを川柳に託して，葛藤や悩みを笑いで吹っ飛ばそう」という本コンテストのメッセージに呼応した作品である。

既に論じたように，学生相談の現場では，オンライン授業や課外活動の休止によって人との接触が極端に減少する中で孤立感を深め，精神的な不調を訴える学生が増えている。また留学生特有の問題として，長期にわたって母国への一時帰国がままならず，ホームシックを訴える学生も増えている。

o.　クリぼっち　互いに言い合う　友も無く
p.　練習も　引退さえも　なくなった
q.　夢にでる　会えぬ友人　会えぬ母
r.　万里越え　挫折憧憬　名古屋まで

オンライン授業，オンラインミーティング，ビデオ通話など，コロナ禍においては様々な ICT が急速に普及・拡大したが，それらは対面での直接的な交流に代わりうるものではない。多くの学生が家族や友人・仲間，近しい人々との断絶に心を痛めている。しかし，その一方で，自らの孤独や喪失感を自由に吐露できる機会は多くない。川柳は自分が抱える感情を内省し，外に向けてそれを言語化するプロセスにもなった。

最後に，コロナ禍における一連の状況を楽しんだり，前向きなチャンスととらえたりする作品や，困難な状況に惑うことなく自らの課題や目標に力強く進もうとする学生たちの作品を紹介したい。

s.　隔離中　窓を閉めれば　部屋ライブ
t.　リモートで　できる研究　無限大
u.　描いている　夢がエンジン　かけ進む
v.　雪が降り　暖房をつけ　書き始め

v. は修士論文を執筆中の学生である。コロナ禍であろうがなかろうが修士論文の締め切りはやってくる。雪が降っていることに気づき，暖房をつけるために執筆の手を止めたものの，すぐに再びまた論文に向かい始める粛々とした情景が思い浮かぶ。r. は日本入国後の14日間の自宅待機（自主隔離）期間中の経験を表した作品である。投稿者は窓を閉め，好きな曲を大声で歌う（部屋ライブ）ことに楽しみを見出し，窮屈な待機期間を乗り切ったという。作品からにじみ出る，困難を吹き飛ばす作者の明るさは，留学生支援にあたる選考委員のある種の励みともなり，優秀賞作品に選ばれた。t. は長年の希望が叶い，自動車メーカーへの就職が決定している学生の作品である。新型コロナウィルス感染症の流行により自動車産業にも暗雲が立ち込めているが，それに負けず前進しようと自らを鼓舞す

る力強さがある。

以上の質的分析からは，新型コロナウィルスおよびその感染拡大による日常生活や学生生活の変化に対する不安や戸惑いといった心情が読み取れた。しかしその一方で，環境の変化への適応力や柔軟性を示す作品も多数あった。コロナ禍における学生支援の場では前者の学生たちへの支援のあり方について重きがおかれるが，後者の学生たちの持つレジリエンスや生命力は，川柳コンテストだったからこそ知りえたものだと考える。今後のポストコロナと呼ばれる将来へ豊かな示唆を示すものとして，支援の議論に活かしていきたい。

５．おわりに

本稿では2020年度の第一回名古屋大学多文化共生川柳コンテストの概要を論じるとともに，投稿作品の量的言語分析と質的分析を行い，コロナ禍における学生たちの意識について考察した。作品を投稿した学生からは，「自粛生活が大変だったので，このようなイベントがあって良かった」，「川柳コンテストが面白いと思って参加した」などの感想が寄せられた。中には，自分の投稿作品について選評を求めたり，コンテストへの参加を機に日本語教師とともに川柳を学ぶ留学生も出てきており，日本語教育にも広がりを見せた。

多文化共生川柳コンテストを実施するにあたり，新型コロナウィルス感染症が世界的な「分断」を生み出す中で改めて文化的多様性と異文化共生の重要性を訴えることを目的の一つとしていたが，HP に掲載された投稿作品を通じて，同じ日本というコミュニティで暮らす日本人と留学生が，このコロナ禍で悩み，苦しみ，そして希望を見出そうとする姿を共有できたのではないかと考えている。

本コンテストは初開催につき，反省すべき点が多々あるものの，参加者からは次回以降の開催を望む声が多く寄せられた。特に開催者の予想以上に日本人からの投稿が多かったことから，選評会の実施など国際共修の場としてより活用できるような仕組みを整えるのが大きな課題である。また，今回採用した「リレー枠」のように，普段はほとんど接触する機会のない文系分野と理系分野の学生が川柳を通じて交流できる工夫も必要である。留学生支援と国際共修の試みとして，今後も多文化共生川柳大会を継続していきたいと考えている。

【参考文献】

柏村祐（2020）『第一生命サラリーマン川柳コンクール　サラ川で見る日本のデジタル化』第一生命保険株式会社・第一生命経済研究所〈https://event.dai-ichi-life.co.jp/company/senryu/common/pdf/sarasen_34th.pdf〉（2021.05.08 閲覧）

水野映子･北村安樹子（2018）『第一生命サラリーマン川柳コンクール　サラ川で見る日本の健康』第一生命保険株式会社・第一生命経済研究所〈https://event.dai-ichi-life.co.jp/company/senryu/common/pdf/sarasen_31th.pdf〉（2021.05.08 閲覧）

Doyle, H.（2010）Interpreting and Intercultural Communication Aspects of a Haiku-in-English Competition. *Intercultural Communication Studies*, 19 (2), 265-284.